

の家に生まれた一丸智定氏(後の橘旭翁 1848～1919)が、より芸術性を加味して広く愛好されるようにしたものです。

昭和初期には、薩摩琵琶から改造された〈錦琵琶(にしきびわ)〉も加わり、琵琶の一大隆盛期を迎えました。しかし第二次世界大戦後、占領下にあつて戦記ものの多い琵琶はGHQから白眼視され、長く不遇の時代が続きましました。幸いにも昨今は伝統文化が再び見直され、琵琶もまた愛されるようになってきました。

現代社会は、テレビやインターネット等により情報が溢れていますが、交通や通信機関が未発達だった時代においては、庶民は琵琶法師のような各地を遊芸する人々から貴重な情報を得ていたことでしょう。

(川村旭芳氏「琵琶 今昔…」より抜粋)

■ 絲詩の世界2017

～ 箏・三弦・尺八・乙女文楽 人形舞 ～

● 11月5日(日) ベルフォーレ津山

14:00 開演 (13:30 開場)

料 金：一 般／2,000円

大学生以下／1,000円 ※全席自由

出 演：《箏・十七弦》浜野秀江(はまのひでこ)

《三弦・唄》馬場尋子(ばばひろこ)

《尺八》米村鈴笙(よねむられいしょう)

《乙女文楽》桐竹蘭紗也(きりたけまさや)

《箏群》津山邦楽合奏団(つやまのくにがくがうだん)

曲 目：「銀河」、「想」、「春日野」、「物は尽くし」他

現代作曲家の創りだした曲を、箏と三弦、十七弦と尺八など一曲一曲違った楽器の組合せでお聴きいただきます。その中の一つの世界を乙女文楽 人形舞で表現いたします。

また、この演奏会は、地元津山で浜野秀江氏の指導を受け、津山市内外で演奏活動を行っている津山邦楽合奏団が出演する市民参加の公演となっています。



▲ 津山邦楽合奏団

アーティストバトン No.42



毎回、アーティストが、お友だちつながりて登場します。



(前回の桜井 由子さんから)

■ 高須 悠嵩

■ 舞踏

津山市在住。10代よりストリートカルチャー、文学、アヴァンギャルドに興味を持つ。

20代前半、仏門修行へ。現在、不定期な舞台活動を国内外で行っている。

農村部の風土、生活に潜む身体活動を探求し、提示することを目指している。

主な活動経歴

2011年、「岡山県芸術文化賞準グランプリ」受賞。

2016年、三浦宏之主催によるダンスユニット「Henry・C・Muller」に参加。金沢21世紀美術館シアター21にて初演を行う。

2017年より舞踏家目黒大路の作品に参加している。



【乙女文楽の歴史】

乙女文楽の誕生は、文楽座の焼失等で文楽が衰退した大正末期から昭和初年にかけての事でした。素人浄瑠璃が盛んで、林二木(じばく)という技量自慢が大阪新世界のラジウム温泉で、素人浄瑠璃の人寄せ策として宝塚少女歌劇にあやかっ、少女による一人遣い文楽を大正十四年に考案、翌年に初演を行いました。

ラジウム温泉専属となったこの座は「娘文楽」と命名され、林の創案した「腕金式」を操って主に温泉劇場で浄瑠璃人形芝居を上演。

その一方で、文楽座の桐竹門造氏・吉田栄三郎氏の手によって考案された「胴金式」を使い、桐竹政子氏が座頭となり、昭和五年に「大阪乙女文楽」が結成されました。「娘文楽」がショー中心の旦那芸であったのに対し、「大阪乙女文楽」は当時全盛の女義太夫や、新義座(文楽の義太夫、三味線)等と組んで興行を行う、より本格的なものでした。

全盛期には「娘文楽」「大阪乙女文楽」「女文楽」の三座が活躍しましたが、戦時中に多くの人形が焼失し、日本の伝統文化にとってかなりの損失となりました。

戦後、桐竹智恵子氏が茅ヶ崎に本拠を置き、平塚市の文化財として保存されています。しかし現在、乙女文楽は大衆芸能として存在せず、プロの人形遣いは数少ない状態です。

(桐竹蘭紗也氏ホームページより)

<http://otome-bunraku.jp/>